李寄
註解 改正月令博物筌 十月部 二

物覺早傳授　全一冊

呉明先生トイヘル學者ノ作ニシテ此本ヲ見レバ物オホエ強クナル事妙ナリ神ノゴトシ何事ニテモ物ニヨソヘテ覺エル法ヨリヘヤウノ傳受ニテアノス

小笠原流 男重宝諸禮訓　用文章入　全一冊

茶ノ運ビヤウヨリ障子ノアケヤウ給仕ノ次第○菓物其外食物一切喰ヤウ盃ノ取ハカラヒ・元服ノ式法・アイサツノ言葉・礼義作法盤方クロシクノセ何レモ西ヲ人子達ニテモ分リ安キヤウニイタシ終リニ口記ス物覺早傳授ヲ加入シテ世ニ弘ム

日本書籍考　全一冊

本朝ノ書物神書国史実錄詩文有職ノ書スベテ題号ヲシルシ真偽ヲ正シ大意ノ附スル二五經十三經等ノ大意ヲ詳ニ記ス此書ヲ見レバ和漢ノ書籍ヲ見ズ大旨ヲサトシ大ニ學文ノ便リニナル書

十月之部目錄

△印俳諧の季をうつ物なり

浅野

日令

十月 亥 月建 謂子 陰陽生 十月異名 発ニ註

△大雪　△冬至賀　△冬至　△陽嘉節

冬至設菓 △献履襪 △赤小豆粥食ふ　△履長賀 △履奉る　△襪奉る

朔日 △暦奏

上巳 △筑紫宗象祭

十三日 △空也忌

十三日 △鉢叩 △暁鉢叩

八日 △吹革祭

上卯 △相嘗祭

朔日 △朔旦冬至

上酉 △平川祭

十三日 △京都 新玉津島御火焼

○春日祭○大原野祭○鹿から神祭○杜本祭○當麻祭○當宗祭○日吉祭

○吉田祭○山科祭○平野祭○梅宮祭○中山祭○松尾祭

中巳 △五節帳臺試 △五節舞 △帳臺の試

十一月 日躰

中寅 △殿上淵醉 中寅

中寅 △鎮魂祭 中寅

中卯 △童女御覽 中卯

△日蔭鬘 △汨かげの紐 △心葉

△小忌衣 △山藍 △小忌袖

中酉 伊豆 △伊豆三島大明神祭 △酉の祭

甲子 △子祭 △甲子祭 △子燈心

中申 江 △近江日吉臨時祭

△掛鳥 △鳥かけ

北八日 △後日舩

北日 △京都宇賀祭

北十六日 △大坂道陸神祭

北十四日 △大師講 △智惠號

北十七日 △南都御祭 △春日御祭

北八日 △親鸞上人忌 △報恩講

北下酉 △京都加茂臨時祭 △北祭

中辰 △豐明節會

中卯 △新嘗會 △新嘗祭

中寅 △狩使

月令

△庭燎

△御火燒

△神樂 △條御神楽 △山神楽 △里神楽

△神樂哥 △神遊哥

△千歳 △早哥 △吉々利々星 △得錢子 △木綿作 △弓立 △朝倉 △其駒 △寛殿哥 △酒殿哥 △西

△阿知女

△校 △片折 △蟬

△諸拳 △葛

△大前張 △小前張

井奈野 △脇毋古 (小前張哥の名) (大前張哥の名) △宮人 △木綿実 礒等 △篠波 △殖槻 △総角 △大宮 △湊田 △蓋 △難波潟 △前張 △階香最 △席枕 △雨野

△山神祭

△髮置

△顔見世足揃 △かぐき足揃

△歌舞妓顔見世 △顔見世狂言

△綱貫

△擽 △かしき

△雪竿

△雪吹

△採物歌 △榊 △幣 △杖 △篠 △弓 △鉾

△韓神謠

△暦賣

△袴著 △袖初 △帶解

△雪車

△雪沓

△雪垣

△雪作

△ぬぎたふれ

時人

△はつ雪 十六
△かつぎ雪 △たけ雪 十六
△雪あられ 十六
△雪礫 十六
△もち雪 十六
△雪轉 △雪まろび △雪まろけ 十六
△雪佛 △雪達磨 △雪布袋 △雪鬼 △雪獅子 十六
△深雪 十六
△雪女 十六
△雪やけ
△雪明 十六
△氷柱 △魚氷 (誤)△鍛竹 十六
△霙 十六
△雪 十六
△鐘ずゐる 十六

艸木

▲新生姜 △生姜掘 十六
△太山櫁 十六
△冬至梅 十六

生類

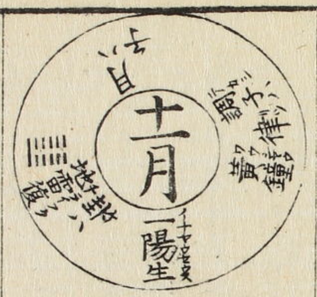
△寒苦鳥 十六
△杜父魚 十六
△鰤 十六

飲食

△干ぐぐり鈎 △うけ菜 △青干菜 △あゝまと酒 △そどもと酒
△新干蕪 △干大根鈎 △澤庵漬製 △干菜鈎 十六

十月之部

△印ハ俳諧の季をもつ物なり



十月ハ六陰生じて陰き
ハまり當月
中冬至より
一陽来復じたり

○調子ハ黄鐘とハ子の律とい
ヒ月令の注よめり

○卦ハ地雷復ハ月令ふ雷ものうち声を
發して有て陰氣ぶ陽氣をかくむる事
なのゆゑざる故ふ声を發るのかくらく

十月 異名 △仲冬。周正△復月△一陽
。天月。暢月。辜月△冬半

和名 △雪見月△子の月△かゝち月
△霜降月△霜月。かゝき月
△霜くだり月。雪まち月

異名註 △仲冬ハ禮記ふ出冬のりふとい
事ニ△周正ハ纂要ふ曰周の世の

正月ハ行る月と有△復月ハ曜日一陽来復する月なるゆゑ△天正月も周の正月と同じ義なる△暢月（のち）ハ禮記の註に陽久しく屈して後ハ暢ぶるゆゑ暢月といふ△玄月ハ同書註に玄を克なりと有て萬物よく克るといふ義なり△陽月と一陽来復する月ゆへ名づく

（哥）秘蔵　ゆく月

つもりゆくとつきの元をかねきは　ゆく月ゆゑなりゆくゆく

莫傳　かぐき月

よもにてふかつる神祇の神酒月　あまれいりの今やわくらん

同　雪まち月

山風を雪待月といひまつ　そとハ来られてふるぬうり成

蔵玉　かぐら月

ふるすきてよものえだの神楽月　なげきさそこれ者のはやなき

同　雪見月

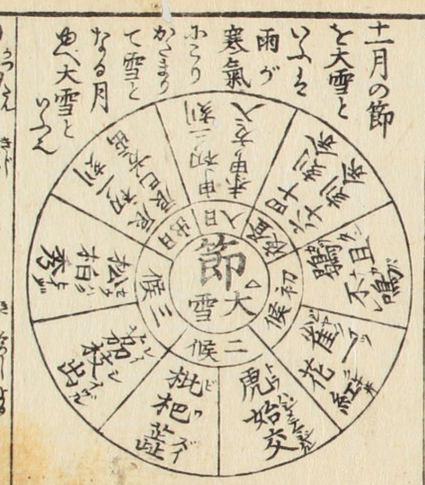
ふりつる雪のもるゝにに雪見月　今ハこそ雪のもるゝ見けれ

（俳）雪月の月候をつきもせず　湖春

（狂）雪月ときみるもみえるゆきしもとりにちる月ゆゑ　野挺

大雪

節の名。七十二候。艸木七十二候。昼夜長短。日の出入等左に記す



十月の節を大雪といふ　雨ゲ寒氣ふりかゝりて雪となる月也大雪といふ

○鶡（うかん）日ハ雉に似て色黄黑夜鳴て日を求る鳥なれハ求日鳥ともいふ

○雀一花の事本草ふも見えずいまだつまびらかならず○虎始交ハ

禮記の注に虎ハ陰物なるゆへ陽の生ずるに感じて交るといへり○枇杷蕋ひらくとハ枇杷の花さくの出る也○茘枝出るとハ茘の芽ずるの陽氣とくりふのび出る也○松柏秀とハ冬木せぬ松柏なれども陽氣にあたりよわされていよく秀る也

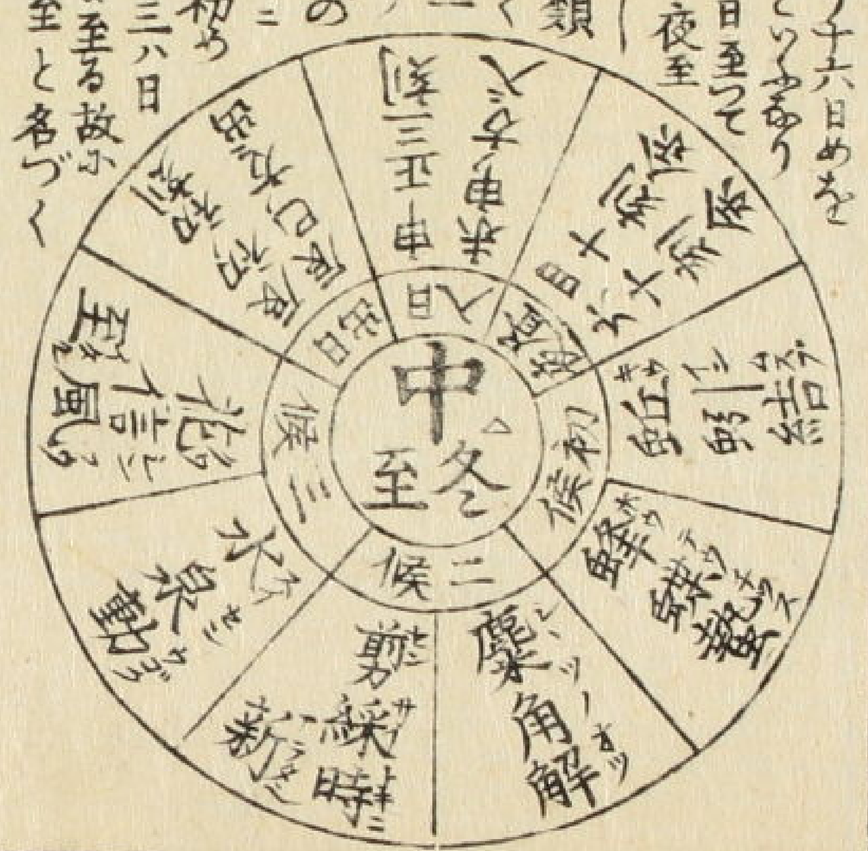
節の養生

今月補藥を呑むべし尤大熱の藥を服れべからず又東南賊邪の風をつゝしむべし是を犯せば病を生ず

冬至

中の名也○七十二候○艸木七十二候。晝夜長短○日の出入等左に記す

節より十六日めを冬至といふなり今日ハ日至つてみじかく夜至てながし事文類聚にいはく至に三義あり一ニ極陰の至り二ニ陽氣初て至る三ニ日輪南に至る故に至と名づく



○蚯蚓結ハ禮記の注に蚯蚓ハ正陽の氣に感じて後に出るもの也今少しの陽氣生ずるときハくもへやくこむすびてのびぬかくちゞむを云也○蜂蝶蟄ハ蝶も蜂もいなごと土に出ざる也○麋角解一陽發るに逢て麋の角おれと落る也○剪綵時新ハ日永くなるゆへ婦人の手業も一線ほどながくなる也剪綵の新きも出来る也剪綵ハきれ細工の事也○水泉動ハ陽下に生る故氷なる水も泉もうごき初る也○花信風至ハ諸菓の花を催す風はじめて吹至る也

冬至賀

聖武天皇神龜二年十一月天皇大安殿に出御有て冬至の賀辭を受給ふと云 續日本紀 朔旦冬至の事ハ朔日の條にあり

冬至の日ハ一陽来復する故に一陽嘉節といふ○唐土ハ今日ハ在京の官人朝服を着し參内拜賀をとぐ上ハ王侯より下民間にいたる迄酒宴を設て祝ふなり

(詞)一とせを君がよはひのはじめにていとながき日のかぎりはしらん　為真

俳 老医者の浦るく安冬ふ春ふ 順川
下ふなる冷も冷冬は 捲る冬至以 柳居

詩 冬至五字對句

夜向三更靜 一陽方動處
ヨハ夜ナカニ近ウシテモノシヅカナリ 一陽ノ氣ガソロクウゴクトコロニ

愁添一線長 萬物始生時
物オモニハ糸スジホドナガウナツタ日ニイヨクマサル ヨロヅノ物ガハジメテキザストキジヤ

詩 冬至七字對句

岸容待臘將舒柳 鐘初動
河岸ニ臘月ヲ一ツテ井ルヤウナケシキハソロクヒカル柳ジヤ カネイオトモ初メテウナリ

山意衝寒欲放梅 日正融
山ノヤウスガ寒氣ヲソレズツキケルヤウナハ岡カウトスル梅ガアルユヘジヤ 日カゲモタイブンノドカニナツタ

詩 冬至詞

至日觀書不幾行 梅梢横月
欲黄昏 冬至ノ日書モツヲミルコイクヨニ月カゲヲヨコタヘテタソガレニナラフトスルハマダ日ノミジカイユヘジヤ

方巨山

漢宮紅影無人見 赤必曾添一線長 官宮ノ宮女タチカ赤イ糸デ日カマダアイトヒトスチホドモ日ノ長サガフタヤウニハミエズ

冬至故事

献履襪 △履長賀 △履奉る △襪を奉る

唐土の婦人冬至の日室中に慢をはなつてまつる是長至と踐の義ニ

魏の曹植ハ冬至ニ履と襪と舅表ニ曰冬至ニ履を献ずるを履もしまつと賀をる事なるはし淵鑑類函ニ見えたり

律管灰飛 冬至の日室中に慢をはなつてまつる置其方位に徙て律管ニ葭の灰をこめおくなり氣至れば灰飛さる 後漢書西

赤小豆粥食 共工氏の子不才ふして冬至の日死て疫鬼となる平生赤小豆を畏れ今日赤小豆粥を食して

ある日二流はゝ〳〵とゝいふちり莊楚歳時記に出さり

冬至

神農祭

唐土の人炎帝と号し百草をなめて藥を初めさり医道の祖神故今日医聊祭ることなり

此月田の神を祭る事 并神農の事委〳〵く日本歳時記に出さり

冬至

天氣

冬至より土けく降出し雲なる雨は晴おそし 雲さとく風さとく星八〳〵さとくなり雲〳〵風さとく星八〳〵ちゝくと見ゆ八雨のあゞるもの〳〵

冬至

占候

冬至より北の方より青き雲なれば来年八大よし 雲なきハあ〳〵くあるきこと氣あれがひて〳〵黒きは水こと白きは疫病くやる黄なるハ火災あり但し五穀田畑よハす〳〵。天晴して暖なれハ来年麥よし冬至の後百日より壬の日あるとハひでりあり二日より壬の日なれバ早ちくなし四日ふれむ豊年こと六日よりあるとバ大水合ふれバ海ひるがゝること九日ふれば麥作よし十日よりとバ五穀よしといふ

冬至

養生

冬至より八陽生して日々に陽氣生ずる時あれバ内より安く坐してみゞろよ他行をゝ〳〵今日房事を慎むべし冬至前後婚禮をゝ〳〵尚又養生の詩故事妙術委〳〵く日本歳時記に出

日令

此部六十月日ハ定つゝる事を出さる事を出さ支の定つゝる事

朔日

今日世俗小豆飯を喰ふ事ハいかゝ〳〵ハとゝいふと李時珍の増山の井に出さり

今日冬至に當る時ハ上下とも祝ふ事たゝ〳〵冬至ハ陽てゝ〳〵ゝも今日ハ小豆飯又ハ小豆餅を喰ふて祝ふるべし且ハ唐の共工氏の故事に准るゆゑ共工氏の事ハ四十メ赤小豆粥の処よなり

○今日枸杞ゆく湯あゝすれハ不老

朔日 △朔旦冬至 今日冬至小當る事をいふたまく小朝日冬至とゝ云ふ時ハ日出度祥瑞ちなふよりて天子南殿ゝ出御ゝなりて節會行々群臣賀表を奉るとゝや委しくハ天文俗談くハしくハ出ス平分ノ本ノ

朔日 △曆奏 今日明年の曆を天子へ奉るとゝ云ふ上南殿ゝ出御ありて是を御覽ある曆乃そじまくハ欽明天皇十四年百濟の博士が奉るとゝ云ふ江次第日本紀等ニ出

排 曆奏ハ老の歯を重ぜかしこゝ半窓

五日 大○住吉新嘗祭。今年の新米を阪神ゝ奉る事ゝ今日祭式あり七日のあり

二日 京○永觀律師忌。東山禪林寺永都 觀堂の開基ゝ天永二年今日寂ス

上卯日 △相嘗祭 相嘗ハ神々相ともふきこしめさゝ義ゝ相嘗とゝきくアイムへと讀む。今日天皇正祿殿ゝ御幸なりて勅なりて

三輪。住吉。熊野。熱田。廣田。生駒。降鉾。大和。津島の大社を祭る

其國の国司ゝ命しゝ其国の宮倉の初米を供ぜゝ先代旧事記ニ出

○延喜式ゝ曰相嘗祭の神七十二座有とゝ云ふ。近頃ハ絶ゝ事根元ニ出

上卯前日 △筑前宗像祭 筑前国宗像郡祭神三座延喜式ニ出

○神體ハ素盞烏のうゝ云ひし三女ゝ田心姫。湍津姫。市杵島姫日本紀ニ出

○一説ゝ大和山城ゝも宗像の社ありアヱいづまゝも同躰の社なり

八日 △吹革祭 爐鞴とも書。鍛工鞴荷を祭る此事三條小鍛冶より始る。昔後鳥羽院太カカを愛せゝふ事を好ませゝ給ひて時の名工ゝを禁裏ゝめされ十二月ふわりちて其月々ゝ番ゝをさゝ定ゝ其時いまゝ山の土を取ゝ用ひゝる故彼鍛冶ゝも度々往来

していなり山の神を拜せしより
ついよいなりを祭る事となれり

(能)花はなくて吹草茶の白さい　北枝
吹草茶筅を体む　桑田口　酉陽

(狂)うりと風呂てふいらの茶筅
面白くてそれ面白かちた　船史

九日 京○貴船結神　十日 京○五條天神
都 御火焼　都 御火焼

十一日 ○今日五加湯　浴もとべし
○今日脊ゑ灸をする事を忌む

十一日 ○京○栗田口神明御火焼あり
○花園院御忌日　京妙心寺ふかう

十三日△ 空也忌　空也堂八京四條坊門堀川ふ有て極樂院とふ
○空也上人八延喜帝第二の皇子也
わかくせをふが出家をとげ天録三年
九月十日奥州會津ゐて往生しふ
京都より東國へ趣きあふ十月十言
なり御遺言ふより東国へ趣あふ
日を御忌日とゝ毎年今日歡喜踊と

躍の念佛を修行也坊中の衆俗體
のまけ并ふ平定盛出家とあり
故事　委しく神佛祭礼記ふ出ておもし

(能)逝きしヨれ空也余傍ら髮　雪山

十三日△ 鉢叩　暁鉢叩○空也堂の僧今
日より四十八日の間洛中洛
外の火葬場を巡りとく瓢箪鉢
たゝきく高声ふ念佛和讃等を
唱ふ昔八鉢をたゝきるるべし

(哥)職人盡哥合
[illegible]
[illegible]

(能)[illegible]　支考
我門を叩き[illegible]　左橘

(狂)[illegible]
[illegible]　信羅

十三日 京都△ 新玉津嶋御火焼　松原通ふ有祭神衣通姫ゝ足利尊氏霊夢よりて
五条俊成卿の屋敷地ふ此祠を

いて即經賢法印を別當に成後
世八季吟又其跡代々守るといつ

十三日 大阪 ○三津八幡宮御火焼
○天王寺佛名會音樂有り

上酉日 大和 △卒川祭 卒川社奈良の子守
町ニ有開化天皇此地
ふて四月九日崩ゝ玉ふ陵あり祭神開化
天皇ノ子守神。住吉の神と三坐之季寄
の書ニ此祭年ニ両度有ことゝもるして祭八
此月ゝかり出ル。按ニ此祭胃ニ行ふを三
枝祭といつ背の祭を卒川といつるゝ
○此祭八春日祭のあくる日行る神祇
令ニのとる三枝祭と同しかるゝ八
四月ゝ〳〵あるべしと公事根元ニ出
又三枝祭八卒川をいつゝと神祇令ニ出
三枝とゝ〳〵さいくさゝもこゝさゝもよむ
○顕昭の説ニ三枝とハかゝを扇ゝ
未顔ゝれバ祝ゝとゝ尚四月四十二又る

十四日 春日祭

中子日 大原野祭

上酉日 園韓神祭

右の祭り春二月と當月とまり

中申日 日吉祭 近江の国日吉山王祭ゝ
四月嚴重の祭礼あり

十四日 杜本祭

中申 吉田祭

上卯 梅宮祭

十四日 當麻祭

上巳 山科祭

上卯 中山祭

上卯 當宗祭

上申 平野祭

上卯 松尾祭

右の祭當月と四月と両度ゝり
能ニハ初めを用ゆるゆゑ四月ニ成冬の
景物ひとゝゝ此月ニ成ゝ季吟翁
も句幹ニゝて季を定むとゝつて

十五日 ○大阪。人ゝ宮の社御火焼
○諸国八幡御火焼有

中五月 △五節帳臺試 △五節の舞
△帳臺の試

舞姫五人ゝりはいりの儀式あり
天子帳臺ニ出御ゝりて御直衣
ニ御指貫ゝ〳〵御笏を持られ
清見原天皇の制し玉ひし事と
いつり天皇吉野宮ニ琴を彈き
ゝひし時ひゝ〳〵の山ニ雲おこり神女

天降りて天皇の曲に應して五度袖をかへして舞こゝろよくく五節と名つく。清見原天皇御宇に唐土より昆崙山の玉を五つまゝせ玉へと其玉間をてらす事一の玉の光り遠く五十両の車小至る是を豊の明と云ふ天皇よしの川にあきして御心とゝまし琴を彈ぜ給ふ神女空より下りて面雪の袖をひるがへしてこれも天くらくしてこゝざりけきはめの玉を出して仙女のうたちを御覽じ給ると云こ源平盛衰記

此説信じがたれども哥ふ〳〵玉と讃ずるはより所なるに似たり

哥 やくもたつあきくれぬとあさひすもゝ玉をたれくてゆきくれぬとあさひすを

古今 天津風雲の かよひぢ吹とぢよ 乙女の姿しばしとゞめん 宗貞

續後撰 月さゆる氷ゆの玉のうゝ小おもの袖もひろうてゝ 実雄

中寅 殿上淵醉 此日五節とて公卿朗詠今様うたひ其後乱舞にうつる次第ふ

たひらし其後乱舞にうつる次第ふ

沓冠をきく北の陣をあり五節所よりて又取々ふ推参ちるとて哥とうゝひろく事〳〵此事正月二日三日ふ者泥醉ハふく酒入醉とゝ事〳〵抄ふ

俳 肩脱の袖ふ物迫〳〵や度上人 奔吟

中寅 狩使 今日五節所よ給ハるる雑子を交野へ狩ましに遣ハさる使をいつゝ

哥 きゝ日さゝのいろうけみうすとかゝゆゝ伍野ふゝも今ゝ 俊頼

俳 乃の花ふ点ふ点し 狩使 嵐雪

狂 貧乏の狩ゝつゝハ節季〳〵とくかゝのゝるひ月のく 信海

中寅 鎮魂祭 人の魂魄のうるゝとゆゝきてゝ身れ中ふ元年十月宇麻志麻治命瑞寶を

つんで帝后のゝち祭らる是はじめゝ此神八座宮内省まゐらしめ秀吉公の時吉田山に遷し奉る

(俳)堤を几巾にまゐらせさぶる　天川

中卯△新嘗會　△新嘗祭ともいふ　○其年の新穀の初穂を神に奉らせ給ふ天子御代初めに行はるゝを大嘗會といひ年毎に行はるゝを新嘗會と云用明天皇三年四月より此事始る神代卷に日天照太神當新嘗と見へられ是八神代より有事なり

(俳)打くひく琴の音し新嘗會　白羽

(哥)禪林七百首　奚侍ひ神のすこもをちえてふかあるむしろ　御製

中卯△童女御覽　清涼殿に童女を召して天子御覽ずる也八五節の舞ふつきてる事ゝ

(俳)ゝゝ八の例を伝後を問まほし　月淡

中辰△豐明節會　前日神に供したる新穀を今日天子自臣下にもてなす故節會行はるゝ

(俳)彼れ生涯も老の明れる頃ゝ　李坡

(哥)さゝくしのかさしは日影かすゝのかるゝ　為家

(俳)老の明るそむゝ市紀

△日陰鬘　△日かげのかゝゝ又次の小忌衣八大嘗會豐明に用ひゝるものなり○日かげの鬘八蘿まゝ女蘿まゝ下り苔とゝふ俗に狐のそせとゝふ艸を冠に垂るゝなり又日蔭の艸をとりて垂るゝといへども日かげ八此鬘を垂るゝ日の光をもまぶやきを萬つ料なり○日かげの糸八近代鬘にかゝに白糸青糸を組て垂るゝ○心葉八冠の巾子に造花をつけるなり今八金紙まゝ白紙なり心葉に料となるなり

(哥)續古今　今ふかふかの明れ日かけ艸いつの世ようかけはゝめらん

(俳)春月や公卿ふ日蔭の糸も添ひ　其角

△小忌衣　△山藍袖　△小忌袖。是八豊の明ふ著する裝束ゐてけれを忌と云心之今日神樂の役ふ當て小忌の殿上人とゐ。小忌衣の色八白き布ゐ春艸又八小鳥をゞと山藍ゐてもりつけゝる

(哥)ふりさなきそのゆれをもころも日かけよみくゝ雲のゝ人　俊成女

(俳)雲のゝよすれめつらし小忌衣　宗因

中酉　伊豆　三嶋大明神祭　△酉の市。祭神大山祇命祭禮の日諸国より商人来りて諸の物を商ふ是を三島酉の市とゝて季ゝ。舩因法師西ゝの哥當社へ奉ゐ～～事なり

(哥)天の川苗代ゐよせきゝらせあまくだりまゐ神ゐゝハ神　舩因

(俳)ゐゝをハ神もゐゝん酉の市　麥永

甲子　△子祭　△甲子祭　△子燈心。當月子の月故子の日ゐ大黑を祭ゐゝ世俗ゐ大黑ハ鼠とつりゝめと

たゝみふといつり二股大根黑米黑豆なゝどを供へ子の日祭をなゝゝ月毎甲子ふハ祭ゐゝ此月ハ子ゝ月故甲子ふ祭ゐゝ

○此月子ゝ日燈心を點ゐれハ火ふ福あり子祭子燈心の事委く歲時記拾遺ふ論あり面白き事ゝ見るべし

(俳)子祭りやゐゝ大黑ふ白大根　鬼貫

(狂)清よきけハ果報ハゐ絶ふ大ゐゝゐゝハのゝてもよゝ　貞柳

十六日　大阪　道陸神祭。俗ゐ泥ゝ祭ゐとゝふなり天王寺村合法辻の辺ふ小さき石佛あり此石佛の顏ふ米のゝをゐり供物と供へ笹ゐ蜜柑と囃して踊る是を道陸神祭とゝ此祭の三日前より村中ゝ童出て往来の人ゐ供物料をもふゐくゝれハ繩ゐ泥をぬりて人を巻くゝむ

(俳)道陸神の中ふゝ出る菩薩　玉芝

(狂)きさらぎ名れ祭りとゝへて及陸祢
ゝさり縄まも元まるれ名り　才流

十六日 ○諸国神明宮御火焼
○大阪座広宮御火焼

中甲 江近日吉臨時祭 此祭ハ建暦三年十月十八日
勅使を立てゝ臨時ゝ祭禮行ハ
れるよう初る今ハ中の申れ日ゝ

十八日 京○御霊の御火焼

十一日 ○雲居寺浄蔵の忌日なり

十三日 ○今日遠方へ行く事なれ病人ハ
見舞事なられ子の年の者ハ慎べし

十四日 大師講 智恵粥 天台宗の祖
唐の智者大師今日
寂に依て天台の諸寺ハ十日より今
日まて大師講を修行を比叡山日光
山等ハ十日より十三日朝まて昼夜法門
有是を論義とゝ民間ハ今日小豆粥
柿柴を折て箸とゝ是を智恵粥とゝ
(俳)智恵粥や何の宗なるも争ハゝ　乙由

十六日 南○春日若宮霄祭又御祭霄催
都ともゝ今日奥福寺の僧頭屋
田楽にゝ長谷川黨神前小桑詣
て野太刀を携へ馬を牽是を遍照
院の渡とゝ今夜亥の刻過若宮神
明の燈火をけし闇中ハ神體を御
旅所ハ遷し其後火を上け歌樂等有
(俳)伍祭ゝて乃ゝやゝを力徙　如来

掛鳥 鳥かけ○春日御祭ゝて
鳥獣を贄ともるをゝ
雉羽兎狸等なゝ十日ゝ十五日
はゝく春日の神宮此獣を改む是
を獣改めとゝ
(俳)掛ゝ鳥郎衆の猟師の青蔦服　静夜

十七日 南都御祭 春日御祭ともゝ
春日若宮の祭ゝ
若宮の御袁所ハ春日の安宮と
ゝいゝ常ハ宮もなく芝原ゝ
今日の御祭ゝうまいりれ御殿を
営ゝ若宮を渡御なし奉る安

年八月十日に此もり御殿の材木ハ大和国中より所をつくく例式のもりつく木を伐出し春日へ奉る九月朔日御繩棟の式例あり當月廿日ハ神殿の造營ハ廿六日の夜御旅所へ神幸ま
ま嚴重の儀式ありく關白殿下より騎馬の伶人ハつかはるる
ハ八日使といふ御祭ハ崇德院の御宇より始るとうや　後村上院御製

(哥)
きたりしやそのかをりをまつ
をくれ月も神ぞふるかな

(俳)神さぬを墓てかく祭ハ来山

十八日　後日能　今日春日ハ能なり祭禮の後故ハ名づく

十八日　親鸞大忌　△報恩講。一向宗の宗祖親鸞大ハ弘長二年十一月廿八日ハ寂に壽九十歲なり故ハ廿二日より今日迄報恩講を修行ハ俗御霜月と云

(俳)まこ清ぬかしらのつまるほどの月　秀頃

廿日　京都宇賀祭　京九條ハ有此所の東西の辻と宇賀のさとといふ倉稻魂神　訣ハ博物筌ハ

(俳)攻めそそぎひま附の宇賀祭　山友

下酉　京都加茂臨時祭　△北祭ともいふ此祭ハ寛平元年十月より初る。かざしの花瓶とりて次第にこれを献じて使冠にけりをもむ式あり清涼殿ハ出御あり行はる　記次第ハ出り

(哥)夫木
神山のみもすそ川ハかけそへく
大そ人のかさしにふちなる　季經

(俳)冠るきしめをとりてい　瓢山

月令

此部ハ日れさごまらぶ侍
十二月一ケ月の事をしるす

御火焼　此月所々の神社ハて火を焼湯を奉る是ハ神樂

庭燎の余風なるべし夫く社まで行りゐく日違へりゐ〜まし前くの日の取よ記ゐ。此月御火焼とゐゐ地中ゐある陽氣を追出ゐ訣歳時記拾遺おくらし

神樂

△東三條御神樂△山神樂△里神樂。昔天照太神岩戸おこ〜りゐ〜せゐひ〜故世界ゐ〜やゝとゐりしし時諸神岩戸の前おあつまり庭火をゐ紀弁嘶しゐひるゐ事有神代巻ゐ出今神樂を行ふハ其余風ゐり故に行ふところ神物皆神代巻ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ東三條の御神樂下の卯の日といふハ昔ハ東三條重明親王の御宅ゐり其辺ゐ〜ゐ両社の神有仁平三年十月下卯の日神樂ゐ奉らせゐゐ事拾芥抄其外諸書ゐ出今ハ絶ゐり

△山神樂といふハ禁中内侍取ゐて行ゐ〜をいふ△里神樂といふハ禁裏の外神社ゐ〜行ゐ〜をいふゐり

(哥)拾遺　触宣

おりとはけれてちとをもれさるつきゐ
ひゐけもそひゐ〜出ぬとゐりへば

貫之

新古今

ゐ〜ゐまゐ〜ゐもかゐ〜ぬ紅ゐふはの
かをゐハ人のとめゐ〜きゐ〜ん

雪玉　詠月前神樂

ゐ〜ふなる星れひゐも天の戸乃
明ゐく月よかけをゐ〜へゐ

(連)ちきはや反代の神ゐ三ゐ山　宗碩
ゐ〜ふおれゐおほ〜をきゐるル　宗養
反ゐよ夢いやるしさよ神楽　紹巴

(俳)お神楽や清士のゐ〜夫のよゐ者　荷兮
星ゐ〜ふ島切りゐき御ル　野水
神楽節まけぬひきゐ扶殿の信　去来

(狂)人の面ふゐ〜ゐ月の扶ゐ〜ゐ
さえゐる節も中もすゐ紀ゐ〜　為国

(哥)天木　里神樂　入道前関白

山りゐゐいゐ〜ゐ〜ぬ星神樂
ゐゐゐゐる象ハゐゐねゐるへし

(俳)緑紅の柿子もはるや雲神楽　白羽

(狂)かくて火は照らしあつる焔や店
蕾わろく甘い星神楽うな　金山

△庭燎　神樂の時燒火。火處燒とハ取々れ庭燎を擧ること神代卷出

(哥)堀川百首
天くだる神のみをとる庭火の烟雲とぞなる　公實

家集　詠庭火神樂　小弁
ふきくだる庭火のおれ柴のるをんもとゝてや神をきくらん

(俳)糸細ゑハおひさし庭燎　三惟

△神樂歌　△神撰歌　△千歳　△早哥　△吉々利星
△得錢子　△木綿作　△畫目　△弓立
△朝倉　△其駒　△竈殿哥　△酒殿哥

○右ハ神樂の時くふ〻し物の名〻
神撰哥ともいふ。千歳の哥ハ「せんさい
せんさいせんさいやよとせのせんさいやまん
さいまんさいまんさいやよろづよのまんさいや

右の外。早哥。得錢哥。酒殿哥等
小皆々一首づゝ哥有委しく補遺小出

○右の外左ハ記ス採物哥。阿知女韓
神。大前張。小前張等ハ神樂催馬樂
のくゝひ物の名こいづれも季すゝ然ども
人倫植物ハ何〻ぞと貞德翁ハいつ
た謠物名目ばかり句ふよてハ季ふるべ
くゝぞ神樂の謠物と慥ふ聞へ季すゝ

△阿知女　是も神樂の謠物の名なる
し說多し委しく補遺小出

△採物歌　△神幣　△杖　△篠　△弓　△鈴
△杉　△鉾　△斧　△斤折　△諸拳　△葛
是ハ神樂を舞人。さゝ紀。幣。弓。葛
などとゝふおのもて其ゝふとる物の事
を哥ふつくりてゝふ〻故ふとりの
哥といふ。哥ハ補遺ふ委しく出ス

△韓神謠　(哥)本ゝ是ハ韓ふくにとり
せんやかくとき○末ハひくてとまふえも
ちてゝれくかれくかゝ神のかくをき

△まゆ　八伊豆国三島とゝ
所より出る木綿ハ紙に
ゝる木なりそれを四手ふして
かゝるとうゝけ神を祭るゝ
ゝと八宮内省ゝまつりまゐ韓神
三座をヤヽまや　梁塵愚案抄

大前張　△小前張。是も催馬樂
の識物なり大前張の哥
△七首小前張の哥九首有名目ばゝ
ふ記ゐ一々哥ゐれも哥ハ補遺ゐ出ゐ

大前張哥の名　△宮人△木綿志天△難波潟△前張△階香取△井奈野△脇母古

小前張哥の名　△蓆枕△閑野△大宮△礒等△篠波△殖槻△総角△湊田△蕁。神樂謠物催馬樂の缺くりゝく補遺ゐ出ゐ

山神祭　所々山林ゐある事なり
△木の上ゐ四手を切てかけ
火を焚祭るをつふこれも庭燎の
余風なるゐ也ゝ

暦賣　俳　暦賣ゐい男乃ゝ
ゝきゝよゐ　淡水

髪置　世俗ゐ男女とも三歳ゐ
△をゝゝひ髪置線ゝて。白髪綿
あれハ十一月十五日又八吉日
。松。橘の作ゐ花。末廣扇ちゞ紙
童のゝゝゐひぎゝに
神へ黍詣をるゝりゝの日乃食
膳ゐハカナ頭とゐる魚美ゐ小石
を膳のふちゐ付る是一生をんゞ
ゝて齒のかゝゝんゐゝゐと祝
ふ心とゝゝ高貴の御方も三歳
ふゝゝせゐふ時ハ此御祝儀ゐ
作ゐ花を頭ゐかゝゐも高貴ゐ例ゝ

哥　源氏葵　髮そき　用ゝゝ
面のゝゝふきのおひせゝく未我のゝゝみん

袴著　△帔初　△帯解。紐直。民
家の男子五歳ゐゝる時
ハ此月吉日をゝゝひ袴著ゝゝ爰
て碁盤のゝへゝく上下を著る

△帔初ハ京よりくハ女子七歳ゟて着初る大阪ハ女子四歳の時當月吉日を為くひ着初るくんき初の事ハ他国ふいなしむりゝ〻ゝきぬ

△そ女ハ白きさらぬをうきそ歩行しまり近頃ハ其きぬふりゆくを除たるをかけきこのゝ

△帯解とりくふハ紐直の事ゟく女子五歳まぞハ帯をせず紐ゟてむすびしが五歳の當月より帯ゟ改むるもあり

○高貴の御方ハ五歳ゟて御袴着九歳の御時御紐直膳月吉日とゟくんく行はるゝといへり

(哥)源氏裳着　うくめやねきつもをかつくまて張くまて張くまてゟるあまれてゝろよ

(俳)袴ゟ女ハ禁裏ゟて帝嘉　素流　後ゟ女中の中ふ市をてさく　永房

(狂)いもうゝふハ肩ゟちゝあり袴ゟの　まちかくさゝふの紀ゝの　百駄

△顔見世足撫　△かぶき足撫。東ゟくゝいゝ大阪ふてハ顔見世の初る前夜役者その芝居ゟ集ゝて盃をあゝをいよ

△歌舞妓顔見世　△顔見世△顔見世手打。大坂ゟてハ當月役者の出交りあり背座元をさゝ役者を一年の宛まてかゝる初めゆへ顔見世と唱へくゝ十日の間夜子の刻ゟ芝居を興行して一座の役者のくゝゝ出て見物へ名乗をゝし其後銘々得手の藝をゝゝ役者見物へ名乗をゝゝ時手打とゝゝ事ゆゝ是ハ若者十人も廿人も連中くゝゝへくゝ一組とゝゝわめ言葉を声よく謡ふて柏子木をゝくゝゝ此柏子甚面白し京都の事ハ年中祭礼記ゝ委く記ゝ

(俳)顔見世や嘆いさむ下邸の格　其角　顔見世や天満祭の次見て　安静

顔見世や新舟の火ハ弱りそう　涼角
顔見世や仔細を戻る果を敷　周平

綱貫　(俳)　緩毋くや太鼓おるれ
　　法師の供　雅有

雪車　板まくく四方とからゝ箱の如く作て屋根を後下りふ
拵へ北地の人ハ是ふのうて雪の上を往来もるゝ箱雪車ともいふ又荷車の車ゐき如さ形ふ拵へ荷物を積て雪の上を引也くも雪車といふ
○唐の輜といふ物ハ板を以て作て足よはき泥の上を歩行其へ三才図会出ル

(哥)　堀川百首　初冬　ゆきふりつもる山路の旅人ふるまくく

(俳)　山路ふ死を問ふ雪の夕やのの乃　竹夏
ゆく雪や車板よ車もやこくと　素啓

櫟　△橇とも骨　右二字ともに又ごん
△かしき。北地の人ふくき雪の上ハ歩行為ふ藤をまゝ木ゆ九きまゝんじの如く作てまゝぐつのゝふ

ゝくとうや見えもんじきもかしきもも云

(俳)　積る雪ハ閑を閉まふむかしき沙　素芹

(哥)　夫木　かしきまく紙の山ちれ旅をもも
雪にまつまぬ身をかまゐかと　仲正

雪沓　革の沓足袋の如くしく
ふくひさ頭まで及ぶのゝ又
ゝくゝまく作てゝうるもあり

(俳)　雪踏や踏て行れの雪沓せ　宗隆

(狂)　初雪のいてゆつくしとる沓の
ひもむもふるゝくゝ　伊貞

雪竿　雪深き国ゝく人往来の
便の為ふ竿を立て標ゝん

(哥)　夫木　大炊御門家佐
紙の山ゝてゝく竿のゝひろなき
日紙ふる雪ゝ　ゝへねゝ

(俳)　雪竿やちゝく谷の今ゝても　五樓
雪竿やくゝもゝくゝる蜀の後　布門

雪垣　雪ふうき国ハ雪ぐれゝ
ゝに毎ぐれる垣なり

(俳)　雪垣やはられゝ丁の仮住居　李郭

時令

(三冬)又ハ(十)など記し侍ハ十月又ハ三冬の季なれども用ゆるものなり

雪作 北国ハ雪降そめんとする時かならず雷なり是を雪おこしと云

(俳)庶の後声ある山や雷なれし　金雅

雪吹 雪風と書。雪風交りに吹をいふ

(三冬)

(俳)かり傘いるゝ金ハ雪ふきハ　市涼

ここそていとゝ入る雨の雪吹ハ　任里

ぬぎたれ 北地の山道ハ人ハ旅人まで雪風ハ吹たをるゝ事ある故いふ北国の寒ひやるべし

(三冬)

はだれ雪 はだれとまだらと五音通ずるゝ事なり

(三冬)(十)

ふりしく雪ハそつりうるふハ

(俳)水の干ぬふはだれやるの海　一井

(哥)夫木

はだれ雪ふりしくもなくて消ぬれハ

世をふるゝやゆゝしくるゝん　主殿

かたひら雪 たひら雪。雪のくさまろうふりて地ハ落

(三冬)(十)

ひらゝゝなるをいふ○一説ハ手ひら雪ゝゝ手の平はどゝる雪ゝとい

雪土産 風ハ時雨と雪とはぶり

(三冬)

通俗志ニ日雪のふゝぬ日積足雪ハ風のふるをいふ

ふりて吹とゝるきとゝく降ゝゝくに

雪をさそふを雪まねとゝいつて

○一説ハ雪まねとハ風の舞ハ事なり

小舟などハ恐るゝ風ゝ雪ふりて此風の

まぜるを雪まねとゝいふ此説ゝゝと

ころあるゝりはゝ日まねハ風ハこと

きる。風の字なくてもとゝるり

○一説ハ雪ゝるきのゝの字ハ付字にて

雪まねゝといつてまねハ舞風の事ゝ

(哥)山家集 これ舟ハ怒つまゝゝ怒

ハせゝいふきゝなけハ言ゝなくなゝ西行

雪礫 雪ハ小石のおとゝおきゝ

(三冬)

かゝあてゝいをいふ

むら雪 雪ゞ石又ハ木などゝ
ふりつりたるを見立
る〻雪をいふ心なるべし

(俳)風後く木くまるりつゞくる 五原

雪轉 △雪まろばし △雪まろげ
雪中の戯まふまる事〻
△三冬

(俳)たゞ一やな狼藉やの新おもるまろげ 千風
女房の力弱く中まること〻 去来

雪佛 △雪達磨 △雪布袋 △
雪兎 △雪獅子。雪おて
△三冬
佛まゝハ獣の形を作るをいふ

(俳)雪佛とゆくふ丸き目むう邪 乙由
目よりもとゞ口もとゞ毎ふまる兎 文栄

深雪 ふかくふりつもる雪を
いふなり
△三冬

雪女 雪ふくつゞる時ハ陰氣凝
つゞく怪しき形をなすハ
△三冬

(俳)はきくれ君〻やほむ雪女 宝庸

雪やけ。霜やけといふが如く極寒
の節の病〻。一説に病ふ
△三冬

あゝぶるふくあつきをいふ雪の
うとつふよ同じ雪あるゝ次ふ
雪明 唐の孫康といふ人學文
を好むよ家貧ふしく
△三冬
油なし雪中ふハ夜雪の明りふて書
をよゝつふよ御史大夫といふ官まる

(俳)見とても嘗れハ嘗る雪ゆゝ瓦砕
かゝる中書ふ夜とゝ雪ゆゝ舟子

氷柱 △垂氷(異名)△銀竹
。氷筋。氷笋。簷の下れ
△三冬
滴る水の氷まるゝ山中の樹梢ゝ
たゝつらゝハ凡一抱ふも及べし

(哥)雪玉 ばらけ形のくゝひの初
尾死さゝれ中おれ姉うゝ枕
千載 雪ばらけきねの床やあれ
ぬゝんつらゝふくうこゝの池水 經房

(俳)本〻の雪を玉でつぬくつらゝ正種
山のまつらかゝみく土産弘鬼貫

冠の中まつらゝの音をあゝ布門
枕の雪ばらふつらゝさゝ其角

霙　雪と雨とまぜて降るをいふ

(哥)夫木

そらもまくかのくもの野ふかくこめて
かそくまもれき世ぬ衣うの郎　經家

みそれふるそ山うの下のをそあらち
ゆむくるゑ色のみのの名ぬる　家隆

(連)水ふるき屋ゐみそれの名ぬる　宗祇
みそれせ一枝ノ香ぬる立枝ぬ　宗碩
山ゐみそれとふるき枝日ぬ　周桂

(俳)みそるゆ弱視くとゐり時　支考
客餞る郭ゐるゐ苦る霙ゐる　其角
ちゐ対ゐかきそゆくるとくこそれぬ　光山

(狂)ゐるけそとゐるひくて出しうと
そそれのかきのはゐ合もるし　貞徳

(詩)霙ノ詞

寒光帯雨山難白　サムキイロガ雨ニマジツテフルニヘ
イカホドフツテモ山ガ白クナラヌ

冷氣侵人火失紅　レイキオカシテヒトヲヒシヤクコウヲウシナフ
サムサガ人ノカラダニコタヘテオコツタ火モキエヌ

古撒明珠跳瓦　ミダサツメイシユニハネヒグ

上バラ〳〵トシテ玉ガヤ子ノ上ニウヘニトブカトオモヘバ　輕敲碎玉　カロクタヽケバ玉ガ

入窻中サラ〳〵トクダケタ玉ガ一ニドウチフヘチツテクル

雹

凡雹ハ皆冬の陽をあらま
ほ夏の陰より伏するなり

(哥)萬葉集

あ〳〵れつ〳〵ちと杉系泥の江れ
茅日をもめとえれとゐるぬうを

土御門院

續古今

ふへ〳〵時ゐ〳〵まて八つれなうて
あ〳〵ふとよゐつるゐる梢末れ素

定為

新續古今

あ〳〵岡山出雲ゐ雲ゐ風きへく
ゐくれ蔭くるゐるゐのゐく系

(詞)○こぶる○ぐる○ぐくる。たゞしる。
音さむき　風ハ風ゐちゐる。風
さゐる。風よたゐる。風さゐ。風
まぜよ　雲ハ　なびくゐ雲。雲
行雲。雲さむき　笹ハ　ゐぐ
○ゐぐ系。いまのさ系なぐ。青さ

[illegible]

竹のもれるゆしけれ音をめでてよみ
会を結ハ。芙蓉ハ。芙蓉ハ。芙蓉やうなる。芙蓉ぐさ。芙蓉やうなる。寒うい
。窓うち吹きる。稲穂のうへよりあるる
音ぞ。ぞくぞくする。又ハ萩の枯葉を
ゑるたゆるわどよりあるうち　木こハ
嵐の雄姿。山のてうりし。おしは
。ふきまよう木のは。紅まふ。家ふ
抜びさし。抜や。ゆくゑぬ蕭ぶき
。柴の戸。閉きの戸

連　動ゆくれ雲と人渡の表物に宗祇
動さられ雲よつうひあるゆくれ宗因

俳　蕭冒やゆくまを雲ゑる不破山　其角
世まよせよ霜くく日ハ雲もき　沾川
雨くふるゆくれ雲は時の者　其角

狂　あくれふる時ハさくの一夜ゑ　真郷
のんてゆくゑのまるをきうゑ　真郷
雨ふハ江のゆくまさくゆくれさ行なれハ
ゑるもあくれのたまくゆくゑして　貞史

詩　雹ノ詞　林信

飛霰瀟々数十程　アラレガハラク
タメニヨホド　トチルノヲ見ワ
トヲク見ユル　寒風吹面逼堪行　イカ
ゼガカホヲフイ　ムカフテ吹レテ　ヒタヒ行レ
テアルキニクイ　雨流鞋底星如洗
アタノヤウニクツノシタニ　キラ〳〵オチテ
アツテ星ノトヾヤウナ　雪落笠簷花来
成　雪ノヤウニカサノハシレカラ
オチテモ二タ花ハミエヌ

雹ノ故事　蜥蜴吐　唐土の刘居中と云
人高とい高き頂
ゑ至ゑる大ゑる蜥蜴数百あり
長さ三四尺此蜥蜴水邊ゑ集って
各水を取る縄ゑ口ゑ入ゑは即
雹を吐く事彈丸の如し俄ゑし
て地ゑ満つ忽震雷起って電光
失し去る明日人来ていふ昨午市
中雹大ゑふるゑ云乃蜥蜴がゐた
わざゑる所をーる夷堅志ゑ出り

鐘さゆる　鐘の音ハ霜夜ハ
さえまはりたり

(哥)ゑる砌の尾上の陰れまさるうあるりきくけく あやおくらん

(俳)納豆とかきまぜるやさゆる時 文慶

○鐘の聲故事冬の十二下おゆり

(狂)面白くやほもくるるの下せもあかるのさゆるくいふ夜なくん 麦波

艸木

此部ハ十月の草木を

ありやしるるを

△生姜堀 (俳)立戻る魚尚くし彩を 陽馬

△太山撞

(俳)太山撞山の行者の菌うり 常州

△冬至梅 冬至前後ハ花開く一重もあるく八重もあり

(俳)おふはゆふ正月ハ梅の冬至梅 宗因

重に一陽はるうあるを梅 竹叟

艸木。石榴。杜丹。山椒。芙蓉。

思意 竹。芍藥。右の類こやし

もべし糞八分水二分うそよし竹

ふハ蕎麦ゞ古屋根のるるはこ菊

の根へハるゝ艸ちらしうみてよし

○松 杉 檜 柏 桑 紅花

右の類冬至の後ハ種まゆうへ

もべし冬至前ハ艸木植べるべ

この論並ハ此月草木心得菓物

貯へゆゝ麦ゝく 日本歳時記ハ出

生類

此部ハ十一月一ヶ月の

生類をありむ

△寒苦鳥 一名鶡鳴 此鳥日本ハ見る事なし 天竺

印度の大雪山ハ此鳥ありと夜

寒を苦で鳴く其声寒苦身

を責ゆ仮明けハ巣を作らん夜

明けゝ又鳴く今日死をまぬ

明日死をまぬ何の故ハ栖を

造て無常ハ身を安穏ハせんと

鳴といふ佛經の説此心を哥ふ

(哥)玉葉集 後京極

[illegible]

夫木　とも[illegible]の[illegible]のありひろ　寂蓮

○平家物語小朝拜の文ハ日いつを初とぞ[illegible]

苦[illegible]

ようて[illegible]

みくすむをいふ[illegible]

(俳)寒[illegible]

杜父魚

[illegible]れ降る時出る魚をいふ　李坡

魚[illegible]　(名)船砌　奔ハ出

谷川[illegible]ハ多し此魚人をみるときは[illegible]の中へ入るさくさうさ[illegible]

[illegible]

(俳)[illegible]

鰤

六月頃小[illegible]する時をツハスと云　朝雄

西国にてワカ十九月一尺許

のをメシロといふ十月ころ二尺許をハ[illegible]といふ江東にてイナタといふ

冬のお長じてブリと云大なるもの

三四尺あり[illegible]く出世魚と祝して

塩[illegible]る鰤を歳暮に祝儀に用ゆ

(俳)千切る衣鰤[illegible]ふ[illegible]中[illegible]　支松

鰤[illegible]中[illegible]　其角

必用

此部ハ十月一ヶ月要用の事

養生天氣食物等記ス

破軍向方

夜九ツ 寅ノ方	夜八ツ 卯ノ方	夜七ツ 辰ノ方	
朝六ツ 巳ノ方	朝五ツ 午ノ方	昼四ツ 未ノ方	
昼九ツ 申ノ方	昼八ツ 酉ノ方	昼七ツ 戌ノ方	
暮六ツ 亥ノ方	夜五ツ 子ノ方	夜四ツ 丑ノ方	

日刻

亥ノ日子ノ日亥ノ刻子ノ刻事をなすよ用ゆべし

方角

家普請他行東南の間高ひては背天道東南ハ行故

樂事

霜の[illegible]の神まふでよ身おしむほ[illegible]のさむ[illegible]

炉邊より聞も[illegible]の音を[illegible]て酒寒陽

氣をうしなくるる夜むなしなど
此頃のうつくしくるるべし

生花

山茶花　早梅　太山櫨　茶花
伽羅維木　このあしハ　こうれ花

衣服

黄菊。移菊。龍膽五節

初雪ハ面白裏紅　蒼紅梅面紅梅裏白

天氣

巳午ぬ方の雲ハ風。風の後ハ雨。北西の風ハ久しく吹事なし。明日十九日雨風をつゝどゝる。冬至の後の北風ハ半日一日ゆくやむ南風も同然なゝ多し南風ま雨よなるまと多し

占候

雷あれば来春米高し。虹あるとハ俄ま大豆高し。日蝕ある時ハ来年大ま不作。夏の冷行れハ疥癘の病多し

養生

此月つめる紙物を枕ふに人の目を昏くま

まゝ蟹亀なゝの甲何るものをゝくゝで人の神氣を撹ぎるゝ其外養生の法ま委しく延壽養生論ふ出ル故ま略之

飲食

此部ふハ十一月一ケ月の食物の類をあつめ出ル

新干蕪（排）

仁吉へ彩ふしかふ
笠の井子　立圃

干大根鉤

香の物大根干ま
當月冬至後早く
干ル ま ふ ん ま
いてくあし

澤庵漬製

此漬ゆう沢庵和尚ま
製ゆうれ也へ名づく
大根百本　塩三升　糀三升　糠一斗

漬法

右常のおゝくゝ漬るゝ
糠内五升　熬ゝく用

干菜鉤

干蕪鉤

かけ菜

青子菜 大根の葉を繩ゆ〜軒ばうづふかけて干すなり

ゆうれ酒 餅米を蒸て酒とも南都の菊屋ゆ製する物名産ゆ常ゆゆうれとも名よびく李ゆん

みぞれ酒 あられ酒の少しふごつくるるものあり

用意品

当月菊の雨覆をさるべし菊の花漸くおとろふ所の上を切べし土地を見立く種をうつく作るべし委しくハ菊品といふる本ゆ出ル右の外青柚葉つきのまゝ久〜く貯へる法まゝとハ柚餅。金柑餅。九年母ゆし其外菓物久しく貯ゆ〜当月製もるよしゆしの訣委しく日本歳時記茶湯料理指南抄此二本ゆ出ル指南抄ハ茶湯會席の献立下ゆ平生の料理月々ゆ記ル

十一月飲食並料理献立

禁物 亀 鼈 鷲 鶚 もろべて甲ある物ゆ乾物の魚 生乃韭 生の薤 生菜 又火ゆ焙る肉と食ふべからず

好物 雉肉九月より此月まで食べし稍補あり○雀肉 冬食ふべし委しくハ十月の部ゆ出るす

料理

汁 さゝうゆ もうゆ ねぶうゆ

かさ・ゆろ葉 大根ゆろし

たこ 葉つきゆでうし

鶏・皮おぢう 葉つき大うん

膾 辛い・赤がい さとうう・大うん せう・ゆう・せうゆ

きんし・ゆゆ きんゆ・ゆび・大うん

ゆまこ・大うん さとうう ゆう・せうゆ

ゆあんご・ゆうげ 岩ゆけ・梅ゆ

清汁

まて貝 ほうれん草

かも ほうぐし

差味

目ぶと 小ばんぶし

鯛 あさつき いりこ

鯉・さえだまめ ろう・わう風・ときさび

鯛 小さい切 大こん・うど えんぜす

鱈 あぶらかす えんを・いりこ

ふまつと 小たをと ときさび・いりこ

煮物

ひしがき ゆるこぶ

かも たたき ぶつだち 孫ぎ せうが

淡やき鯛 くづあん ぜうが

生あまびちん くづあん ときさび

せうゆ ふるいく

雁・あまびと 細づり 赤みそけ

生鯛 あぶらかす 孫ぎ しろね

和會物

数のこ・昆 ふでゆあへ

いりこ ぜうゆ ほこ

生がいせん さうきいも 青ふとときそ

吸物

むき麩 自そ うど・ふくさ 青あへ

むき麩 ホくげ 月上

鮒のる 菜ぜん孫ぎ

焼ふりろこ きのこ丸こ

精進

汁

松茸 菜ぜんぶり

孫いも 皮ごぼう しめさけ

鰹 引皮 于ぜんぜう

孫ぎ 小口

志じこ ごとみそ

ちき・椎茸 干ぶるあく

せうゆ ふるいく

赤みそ 青ふるく

清汁

松茸 ゆの菜

けし菜 やきふ うど

彩ると 兎 やきとうぬ

ほしくし ふたのこう

あげうん ぶやく ごぼううん 木のこ

生ぐり こしやう

ちやうろぎ ぶづく

膾

大こん・えす・あげふ・あまぜ 木くげ・そう・ぜうが・ぶうす

あげ千房 木くげ せうれくき

れろ・大こん 木くげ あげふ

めうが 竹ふ ぶぜ 出ぶさけ

大こん 花ぞす ほそやたぶふ たでぞ

差味

あげふ・えす 塩ねぶけ あ孫ぞ

えすいも・ぶ さけ ぶきう・ぜうが いりこ

ぐんぞうりやし　あげふ・なうし
ぐんぞうりやし　ぜんぜ・本ムーげ
あるうーくけせん　そう・えんぜを

煮物

たかべらのあん　大ムラ人　志邑　ミウ茶ふ

ぜんまい　やきふ　あぶー
れーム　大ムラ人　大ムめト　大きいも

ぞうのいも　ぞうすい
れんこん　ぞうすい

よせ　ちいも　大根さけ
麦梅　ひらそんぶ　ムらそる

ムぐひどき　ひば　やきぐり

和會物

大ムラ人　ムラ茶
大こん　九むき　新のうあへ

黒くるへ　ゆりね　ゑーつへ

吸物

はまぐり　きくな
卵とけ　うる

時物

鳥

地・鴨・ひーくひ・鹿・あひる・小名数ふく

魚

浪ひーこ　ゑゲーぐ・ふぐ・いるーひーこ・さぶい・ひなざい・
ゑそ・ひを・かさ・たう・めどろ・
こい・ふる・あめれう魚・

青物

たこん・かふ〜・こかん
ふきれそう・大根十月迄

淺野

料十二

錦嚢万家節用寶　全一冊

此書初メニ書始詩哥・四躰ノイロハ易ウラナヒ・筆道大意・百官名目・手形案文・進物書附仕ヤウ・名頭字・月ノ異名其外人家日用重宝ノ事八十箇條アツメ○次ニイロハ分ケ早引節用集ヲノヤ第三ニ天地万物ノ繪本ヲ出ス此繪本ハ上ハ日月星辰・雪・雷・雨ヨリ山川宮寺人物艸木魚鳥獸地震ノ図ニデコトぐクノセ人物ニテモ日本バカリニアラズ唐天竺其外三千世界ノ人物ニデコトぐク図ニアラハス鳥獸モ日本ニ見ナレザルモノニテモ天地ノ間ニアラユルモノハコトぐク繪図ヲ出ス終リニ年中行事トテ諸国神佛ノ祭禮縁日クワシク出ス

詞用集　全一冊

狂哥俳偕ノ詞寄ノ書ナリヨセモノ縁ノ詞ヲ集メ古哥ヲ引註ヲ加ヘ大ニ便ニナル書ナリ

淺野